

若葉の子 成長のプロセス〔クラス名のゆかり〕

保育園の各クラス名には、独特の可愛らしい植物名が定着していて地域社会の人達に親しまれている。何れのクラス名も伝統と歴史を刻んでいる。



つくしは、春先に土手にちょこんと顔を出して、もう春が来たよと告げてくれる。春夏秋冬の最初の季節の訪れは、誕生間もない赤ちゃんの健やかな育ちを象徴しているよう。



たんぽぽは、やはり春の代表的な可憐な花で、小さいながら愛しく可愛い。日当たりのよい草地に生え、春は名のためのまだ風の冷たい時期に暖かさに恵まれて元気に成長する花を思う。



すみれは、山野や道端に自生する花。人として漸く独り立ちできる時期の頼もしさが見られる。かつて宝塚歌劇の全盛期に、すみれの花咲く頃、と歌われ多くの人たちから持てはやされて一躍、すみれは世を明るくした。すみれさんは家でも保育園でも周りの人を明るくしてくれる子たちばかり。



ももは、バラ科の植物で春に淡紅、濃紅、白などの重弁花を開いて華やかさを象徴する花。昔から3月初めのももの節句で人になじまれ、親しまれている。保育園では、ももぐみさんは年少組みとして多くの弟妹と兄妹に囲まれながら、沢山のおともだちが出来るのも、ももぐみさんの特権と言える。



うめは、何と言っても晩冬から初春にかけて寒風にさらされながらも凜と咲く一輪の花が心に浮かぶ。うめは、古くから観賞用庭木として珍重され愛される。よく、うめにウグイスのたとえのあるように、よい取り合わせのたとえで、仲のよいおともだちとの間柄にたとえられている。寒さに負けず立派に成長しているうめぐみさんにビックリ。



さくらは、日本国の象徴の花。そして若葉保育園の顔。弟や妹たちに、見事に咲きました、と誇らしげに振る舞うクラスの顔、顔、顔。さくらの花が咲く頃には保育園を元気に巣立って小学校へ入学の時。沢山の思い出を残して、胸に秘めて全ての人を明るく楽しませてくれる。花は桜木、人は武士という言葉からも、桜は最高の花といわれている。

人は皆、いつでも夢と希望をもって固有の花を咲かせようと努力するもの。小さい花、大きな花、どんな花でもいい、人それぞれに自分らしい花を咲かせよう。